痛みの分析

羽地　亮

はじめに・暫定的考察

「痛みがある」とは、どういうことだろうか。

まず、明らかに、痛みは、物理的対象とは異なるありかたをしている。すなわち、痛みは、誰かに感じられてはじめて「存在」し始める。これに対して、椅子は誰かに認知されるまでは存在しない、と主張する人はいないだろう。また、私の本は私の所有物である。しかし、それと同じ意味で、私の痛みは私の所有物である、とは言えないようにみえる。というのは、私の本については、その所有権が他人に譲渡されうるけれども、私の痛みについて、それが他人に所有される、譲渡される、というのは論理的に不可能ではないだろうか。論理的に譲渡不可能なものは、所有されることも不可能ではないか。しかしながら、いや、私が痛みを所有するということこそ、最も本来的な意味での「所有する」ということなのだ、と言いたい誘惑がある。なぜなら、私の経験について「痛み」という言葉を誤って適用することはありえないではないか。「痛み」だと思ったが、実はそれが正しくは「痒み」であることが分かった、ということは私の経験に関してはありえないではないか。つまり、私の痛みが私の所有物であるというのは、痛みとは、本来私だけが直接近づきうる対象、つまり「私的対象」であるということなのである——。

確かに、痛みのような感覚は、他の心理的概念に比べても、すぐれて「私的な対象」であるようにみえる。例えば、自分の何げない振舞いに気付いて、無意識のうちに彼女を愛していたこと（または、憎んでいたこと）が分かる、というような場合がある。これに対して、私の痛みについて、それを私が発見するとか誤って同定するというようなことはありえない。

ところが、一方で、痛みには物理的対象と類比的な、公共的な側面もあるように思われる。すなわち、痛みは空間的にも時間的にも記述されうる——痛みの場所を探り当て痛みの持続時間を計測できる。（これに対して、理解や知識の生じた場所を探り当てそ

の持続時間を計測することはできないだろう。）また、痛みは外部世界からの刺激を原因として引き起こされうる。さらに、私は他人の痛みを感じることはできないけれども、他人の表情、身振り、叫びなどから他人の痛みを知ることができる。

このようにしてみてくると、痛みというのは、私秘的なものと公共的なものとがインターフェイスするところ、双方の界面に存在することが分かる。痛みについての探究は、すなわち、私秘的なものと公共的なものとの関わりはいかなるものか、という問いに答えることにほかならないのである。そして、この問いは、デカルト以来の哲学上の大きな問題であることは言うまでもない。

それでは、「痛みがある」とはどういうことか、という問いに答えるためには、どのような手段をとればよいのだろうか。内観心理学のように、痛みを内観の対象として扱い、それに意識を集中して記述を行えばよいのか。または、行動主義者となって内観法を拒否し、もっぱら客観的に観察される行動を考察の対象にするべきなのか。あるいは、第三の理論を打ち立てることが必要なのか。私はこれら三つのいずれの問いに対しても、否、と答えたい。私がこのように答える根拠は、私的なるもののステイタスに関するウィトゲンシュタインの執拗な思索の批判的検討にある。彼の思索が私秘性に関する哲学的議論の最適の叩き台のひとつであることは、異論のないところであろう。以下、彼の考察をアリアドネの糸にしながら、問題を考えていくことにしよう[1]。

1 記述的な痛み

まず、本節では、痛みに関する報告が記述的であると言われることの意味を検討し、次いで、そのような痛みの規定が孕む問題点を考察する。

例えば、医者が患者に具合はどうかと尋ね、患者が「痛みがある」と答える。患者は、自分の身体のどこが痛いのか、どの程度またはどのように痛いのか、その痛みはどのくらいの時間続いた（続いている）のか、といった点を細かく医者に伝える。このとき、患者は医者に対して明らかに自分の痛みについて報告し記述している(cf. Z §482, RPP Ⅰ §695)[2]。

ところで、『論理哲学論考』を書いた前期ウィトゲンシュタインは、有意味な命題はすべて記述的であると考えた。そして、1929年以降の中期ウィトゲンシュタインは、そのはじめの一時期、前期の考え方に検証原理を導入し、検証できない命題は無意味であると考えた。そして、検証可能な有意味な命題の典型――「純粋な」命題――として、

彼は直接的経験を記述する命題を採用した。一人称現在時制の感覚報告命題がそれである。こうした一連のウィトゲンシュタインの考えを、思想史的な観点から、「記述主義的誤謬」や「完全検証の不可能性の軽視」として断罪することはやさしい。しかし、彼の考えには、現在でも検討に値する一面の真理が含まれている。次の命題を考えてみよう[3]。

(P) 私は痛みがある、ゆえに、ある人は痛みがある。

(P) は明らかに健全な推論である。このことは、(P) の中の「私は痛みがある」という感覚報告文が、真か偽であること――その意味で、記述的であることに依拠している。そして、「私は痛みがある」という感覚報告文は、連言や選言などをこしらえる真理関数的な操作の基底になりうる。したがって、「私は痛みがある」という感覚報告文は記述的でありうるのである。

しかし、この結論については二点ほど注釈が必要である。まず第一に「私は痛みがある」という感覚報告文の真偽についての規準[4]は、通常の報告文（記述文）の真偽についての規準とは異なっている、ということである。「私は痛みがある」という文は、何らかの出来事を模写しているわけではない (cf.RPP Ⅱ §177)。なぜなら、痛みについて模写し損ねた（例えば、痛みだと思っていたが実は痒みだった）ということはありえないからである[5]。正確には、この文の真偽についての規準は、誠実か不誠実かについての規準によって保証されている、と言うべきである (cf.PU p.222)。

第二に、「記述」とは、家族的類似性を帯びた概念である、ということである（cf. PU §§290-292, RPP Ⅰ §572）[6]。様々な「記述」がある。私の部屋の中の様子の記述、私の心の状態の記述、何らかの計画の記述、架空の対象の記述、等々。物理的対象の「記述」と私の痛みの「記述」とは、既述の点からも明らかなように、同じ言葉でも異なって使用されている――すなわち、異なる言語ゲームの中の言葉である。

ところで、このように、「私は痛みがある」という文は記述的でありうるという主張に留保がつけられると、「この主張に対して別の考え方はできないものか、ましてやこの主張を一般化して、『私は痛みがある』という文はいかなる場合にも記述である、と主張することは不可能ではないか」という見解も当然現れるだろう。「記述」というからには、記述するもの（文）と記述されるもの（現実）とが区別されているはずである、

と考えるのは自然なことである（私はこのような区別のない「記述」があってよいと考えるけれども）。しかしながら、「私は痛みがある」にはこのような区別は存在しない。このことは、「私は痛みがある」に対して「君はそれをどうやって知るのか」と問うことが意味をなさないことに現れている。内観心理学者はこの問いに対して「内観によってだ」と答えるかもしれない。だが、内観による彼の調査――自分が痛みをもっているかどうかの調査なるものは、少なくとも通常の意味での調査ではない。なぜなら、そこには正しい調査と誤った調査が存在しないから（繰り返すが、痛みだと思っていたが実は痒みだった、ということはありえない）。結局彼は「私が痛みを感じるから、私は痛みがある」とでも言うほかない。しかし、この文の中の「感じる」と「ある」は同じことだから、この文は何も語らない。

ここで、ウィトゲンシュタインの『哲学的文法』の論述が参考になる(PG ch. Ⅶ)。そこで彼は志向的体験の分析を行い、期待とその実現（あるいは、言語と現実）の内的関係の主張を推し進め、期待を期待たらしめているものは期待の言語表現であるという見地に至った。期待と実現とは、両者が同じ命題で記述されることによって合致する。そして、期待の言語表現はそのまま期待の行為となる。こうした志向的体験の分析は感覚や感情といった非志向的体験にも当てはめることができよう。「私は痛みがある」という文は、嘘ではありうるけれども、間違って本当でないことを言っているということがありえない(NL p.294)。ここでは記述するものと記述されるものとが融合している。痛みの記述はそのまま痛みそのものである(cf.NL p.277)。だが、これは実に奇妙な言い方ではないか。なぜなら、これは公共的なもの（痛みの言語表現）が私秘的なもの（痛み）である、と言っているからである。今や我々は、公的なものと私的なものとの区別を疑わざるをえない見地に至っている。「痛みを記述する」とはミスリーディングな言い回しであって、それは決して「私秘的対象を記述する」ということではないのである。それゆえ、「私は痛みがある」という文は、「記述」とは異なる角度からもみることができる。表現――何か隠されたもの、私秘的なものの表現というのではなく、行為の延長（代替物）としての表現――としてみられた痛みを、ウィトゲンシュタインは「表出」(Äußerung) と呼んだ(e.g. Z §472)。彼は「表出」という概念を介するのでなければ、痛みという現象を明らかにすることはできないと考えていたようにみえる。そこで、次節ではこれを検討の対象としなければならない。

2 表出としての痛み

2・1 痛みに関する言語ゲームの基盤

前節の最後の部分を敷延すると、「私は痛みがある」という文は、私的経験という規準（正当化）に依拠して述べられるのではない。この文は、それが表出――表現行為に取って代わるもの――としてみられる以上は、いかなる規準も正当化も必要としない(PU§§289-290, LSP p. 35)。（それに対して、三人称で述べられた「彼は痛みがある」という記述は、振舞いという規準によって正当化されるだろう。）本節では、表出としての痛みに照準を合わせ、痛みに関する言語ゲームの習得のためには、まず、痛みに関する振舞いが要請されねばならないことを明らかにする（2·1）。次に、習得された後の表出としての痛みが言語として機能するための条件は何か、そして表出としての痛みという考え方が孕む問題点は何か、ということを考えていきたい（2·2）。

まず、我々は痛みに関する言語ゲームをどのようにして習得しているのか。この問いにウィトゲンシュタインはこう答える。

「次のことは一つの可能性である。言葉が根源的で自然な感覚の表現に結び付けられ、その表現の代わりになっている。子供がけがをして泣き叫ぶ。すると大人たちがその子に語りかけて、［「あいたっ」のような］感嘆詞を教え、後には［「私は痛みがある」のような］文を教える。大人たちはその子に新しい痛みの振舞いを教えるのである。

「それでは君は、〈痛み〉という語が本来泣き叫ぶことを意味していると言うのか。」――とんでもない。痛みの言語表現は泣き叫ぶことの代わりをするのであって、泣き叫ぶことを記述しているのではない。

いったいいかにして私は、言葉をもって痛みの表現と痛みとの間にさらに割って入ることなど望みうるだろうか」(PU §§244-245)。（［　］内引用者）

ウィトゲンシュタインによれば、言語の基礎には、振舞いという前言語的な体制があるのである。まず最初に子供がけがをして泣き叫んでいる。この振舞いという痛みの規準なしには、大人は子供に痛みの概念を教え込むことができない。振舞いを土台にして、子供は最後には「私は痛みがある」という痛みの言語表現を獲得するに至る。彼は痛みに関する大人の言語ゲームに参加できるだろう。（なお、ウィトゲンシュタインが「一

つの可能性」と言っているのは、他の言語修得の仕方もあるかもしれないという譲歩である。しかし、彼が自らの洞察を、差し当たって揺るぎないものと考えていることは、文脈からみてとれる。)

私の痛みではない、他者の痛みについても事情は同様である。

「自分自身のみならず他者の痛みの箇所を手当し治療すること、言い換えると、たとえ自分自身の痛みの振舞いには注意を払わないとしても、他者の振舞いには注意を払うことは、根源的な態度である。このことを考慮に入れるのが、ここでは有益である。

しかし、ここでの『根源的』という言葉は何を言おうとするのか。やはり次のようなことだろう。このような態度のとりかたが前言語的であるということ、すなわち、言語ゲームがこのような態度のとりかたに基づいており、このような態度のとりかたが思考法の原型であって思考の結果ではないということである。

次のような説明は『本末を転倒している』と言うことができる。すなわち、我々が他者を介護するのは、自分自身の場合との類比によって他者もまた痛みを体験していると信じるからだ、と。——そうではなく、要するに人間の振舞いというこの特別な一章から——この言語使用から——ある新しい側面を学ぶことだ」(Z§§540-542)。

ウィトゲンシュタインは、今度は子供の振舞いではなく大人の振舞いを問題にしている。痛みに泣き叫ぶ子供を手当しようとする大人の反応、振舞いは、子供の痛みの振舞いと同様、前言語的な体制として言語を基礎づけている。やはり、大人のこの振舞いなしには、痛みの概念は生じてこないだろう。他者の経験に関する類推説のような主知主義的な見解は誤っている。ウィトゲンシュタインによれば、言語は理性的推論から生じたのではない(ÜG §475)。「初めに行為があった」(ゲーテ)。この行為、反応、振舞いが言語ゲームの起源であり、そこから洗練され複雑化した形式の言語ゲームが発展してきたのである(ÜG §402,UW p.403,VB p.70)。

ウィトゲンシュタインのこのような考えは、ラッセルの「経験主義の限界」[7]という論文に触発されて生じたと考えられる(UW p.427)[8]。ラッセルは、言葉(例えば「猫」)と知覚の対象(眼前の猫)とが因果的に結び付いており、この因果関係が経験に基づく推論によらずに直接に知覚される、と考えた。彼によれば、この直接の知覚は、

反証に晒されることのない究極の確実性をもって我々の言語を支えているのである。ウィトゲンシュタインは、言語と言語外の対象との因果関係が我々の言語の理解を可能にしているとは考えなかったけれども、何らかの因果関係が推論によらずに確実性をもって我々に知られるという点ではラッセルに同意する。ラッセルの論文の後、1937年に書かれた「原因と結果、直観的把握」において、ウィトゲンシュタインは、我々の言語ゲームの根本形式は疑いが存在しない形式である、と書きつけ(UW p394)、さらにその後に、疑いや不確かさをさしはさまない、確信をもった行為、反応、振舞いが、言語ゲームの起源であると主張した(UW p.404)。

ところで、痛みに関する言語ゲームの習得のためには、痛みに関する、確信をもった振舞いが要請されなければならない、というウィトゲンシュタインの主張は、少し独断的ではないか、疑いをさしはさみながら確実なものへと至るというデカルト的な方策を取る余地はないのか、という反論は当然ありうるだろう。また、ウィトゲンシュタインの言語修得の説明は、比較行動学者や社会人類学者がたてるような経験的仮説に過ぎないのではないか、彼の説明の哲学的な意義、射程は果たして存在するのか、という反論もまた想定できよう。これらの点については、彼は次のような思考実験を行っている(UW p.397)。

①ある母親の子供が泣き叫んで頬を押さえている。これに対する一つの反応は、母親がその子を手当し治療することである。このケースでは、その子には本当に痛みがあるのか否かという疑いが生じていない。

②別のケース。子供の状態とそれに対する母親の通常の反応は①と同じ。しかし、ある状況下では、母親は懐疑的に振る舞う。母親は疑り深く頭を振って子供の手当をやめる。母親は苛立たしさや同情の欠如を表しさえする。

③さらに別のケース。まさに最初から懐疑的な母親。子供が泣き叫ぶと、母親は肩をすくめて頭を振る。探るようにその子を見て、その子を調べる。例外的な場合にのみ、母親はその子をあいまいに手当し治療しようとする。

①の母親は躊躇せずに反応し行為する。このような、疑いのない確信をもった振舞いを前提してはじめて、②の母親の疑いの振舞いが想定できる。ところが、③のケースのように、確信をもった振舞いが最初から存在しない場合、③の母親の振舞いを我々は懐疑的態度とは呼ばないだろう。③の母親の振舞いは何か奇妙で気違いじみているように思われる。ここから、疑いから言語ゲームを始めることは不可能であることがみてとれる。

この不可能性は論理的な不可能性である。なぜなら、確信が存在しないところでの疑いはもはや疑いではありえないからである。そのような「疑い」を疑う人は、少なくとも我々の世界の住人ではない。そうではなくて、言語ゲームは――そして行為は――確信から始まらなければならない。したがって、ウィトゲンシュタインの言語修得に関する躊躇のない振舞いの要請は、論理的な必然の要請であって、経験的な仮説ではない。そしてこの要請からは、言語に対する哲学的な反省の、示唆に富む洞察の一つが導き出される。それは、言語ゲームは根源的な振舞いの延長であるということである(Z §545)。すなわち、痛みの言語表現――表出は、泣き叫ぶことの代わりをし、新しい痛みの振舞いとなるのであって、泣き叫ぶことを記述しているのでも痛みを記述しているのでもない（しかし、前節でみた記述的な痛みの報告は、表出からさらに派生してきたものだろう）。言語表現が行為であるという論点は、言うまでもなく、哲学的に生産的な主張である。しかし、小論はこのことに深入りするものではない。

2・2 表出が言語であるための諸条件

既に習得された後の表出としての痛みは、やはり言語の一部であり言語として機能するのであるから、この表出が言語であるための条件は何かということは考察されるべき権利問題である。次の三つの条件を検討してみよう。第一に、音声と振舞いとの間に規則的連関が成り立っていること。第二に、表出が外的世界の中の他の事象と結び付いていること。換言すれば、表出を物理的世界に適用するための手段が存在すること。第三に、痛みの感覚の実質、内容が存在すること。これらを順にみていくことにする。

第一の条件について。表出において、音声と振舞いとの間に規則的連関が存在しない場合を考えてみよう。例えば(PU §§ 206-207)、未知の国へ我々が研究者としてやってきたとする。この国の人々は、通常の人間的活動を行い、分節言語らしきものを用いている。我々には彼らの振舞いが「論理的」であり理解可能であるように思われる。ところが、彼らの言語は我々には習得不可能であることがわかる。というのは、彼らの活動において、音声と振舞いとの間に規則的連関が存在しないからである。だが、彼らに猿轡をかませると彼らの活動は混乱するので、音声は余計なものではない――。しかしながら、表出は振舞いにとって代わるものであるから、表出の音声が振舞いと規則的に連関していない場合、この表出は音声ではあっても言語としては機能しない。その音声はどういう振舞いの延長であるのかわからないのである。なお、音声と振舞いとの規則的連

関の成立は、表出が言語であるための必要条件である。なぜなら、ある人にこうした規則的連関が存在しても、彼がこれまで痛みを感じたことが一度もないならば、彼の音声はオウムの発声のようなまねごと（もちろん振舞い付きだが）に過ぎないからである。

第二の条件について。表出が外的世界の他の事象と結び付いていない場合を考えてみよう。例えば(PU §243)、ある人は、他人には理解できず自分にしか理解できない言語、すなわち直接的で私的な感覚を指し示す言葉から成る言語を用いるとする。また別の人は、自分専用の独り言しか言わず、独り言を言いながら様々な活動をする——。後者が、痛みについての発言（表出）をするとき、その発言は、自分の腕に刺された注射針や注射器をもつ看護婦や自分のしかめ面やその他諸々の外的世界の事象と結び付いている。それゆえ、彼の発言は、我々の言語に翻訳可能であり、有意味な言葉になりうる。ところが、前者の何らかの発話は外的世界と全く結び付いておらず、彼の発話を物理的世界に適用する手掛かりはない（彼が診察室で注射されるというような状況は想定されない）。表出は振舞いの延長である以上、外的世界と関連することによってはじめて有意味となり言語たりうるのである。回すことはできても、それと一緒に他のものが動かないような歯車は、機械の一部ではない(PU §271)。なお、表出と外的世界との結び付きは、表出が言語であるための必要条件である。なぜなら、ある人にこうした結び付きが存在しても、彼がこれまで痛みを感じたことが一度もないならば、彼の音声はオウムの発声に過ぎないからである。

第三の条件について。痛みの感覚の実質、内容が存在することは、表出が言語であるための必要条件である。すなわち、感覚の実質が存在しなければ（これまで痛みを感じたことが一度もなければ）表出はオウムの発声に過ぎず、かといって、感覚の実質の存在のみをもって表出を言語とすることはできない。以上三つの条件をひとまとめにして、はじめて表出が言語であるための十分条件が得られるだろう。なお、既述の痛みの振舞いと同様、感覚の実質は、痛みの言語を基礎づける、前言語的な体制であると言えるだろう。もちろん、感覚の実質は、「痛み」という語が指示する対象なのではない。記述的な痛みの報告にも、痛みに関する表出にも、そのような対象の存在は一切要請されていない。しかし、「感覚は何ものかではないが、何ものでもないわけではない。結論は、何ものでもないものが、何も語りえないような何かと同じ働きをするだろう、ということに過ぎない」(PU §304)。

最後に、表出としての痛みという考え方が孕む問題点を考えよう。それは、「痛みが

ある」ということが、果たして振舞いに還元できるか、という問題である。まず、直ちに気付かれることは、「痛みがある」という文が、振舞いに対してもつ利点である。すなわち、この文は分節的であり、記述的にも用いられ、真理関数的な操作を加えたり時制を変化させたりできる、真か偽（誠実か不誠実）でありうる、といったことである。しかし、問題はもっと深刻である。表出が言語として機能する条件の第一において、表出は振舞いの代わりをするのだから、音声と振舞いとの規則的連関がない場合は、表出は言語ではない、とされた。しかし、これは表出という概念から帰結する断定である。音声と振舞いとの結び付きがわからなくても、あの未知の国の人々は、音声を手掛かりに情報の相互伝達を行い合理的活動を営んでいるのだから、何らかの言語を使用しているとはいえないのだろうか。彼らの音声は表出ではなくても言語である可能性はあると思われる。また、同じく条件の第二において、表出は振舞いの延長なのだから、外的世界と関連することではじめて表出は言語となる、とされた。それゆえ、私的な感覚を指示する自分専用の言葉を用いることはできない。しかし、外的世界と結び付いてはじめて言語たりうるのは、表出だけではない。感覚質の記述的な報告もまた、物理的世界に適用されうるのでなければならない。さもないと、感覚記述は言語ゲームの範疇に入らなくなってしまう。しかし、ウィトゲンシュタインは、感覚質の直接的生起（条件の第三）の記述と外的世界との関わりについて、ほとんど等閑に付している。結論として、彼は表出という概念を重視し過ぎている。その結果、彼の議論は、言語でありうるものまで言語ではないとする危険性を孕んでいるのである。

3 結論

冒頭の問いは、「痛みがある」とはどういうことか、というものであった。私は明確な解答をもちあわせてはいない。痛みは、記述的なものとしても表出としても捉えることができる。どちらのモデルも積極的な理論ではない。なぜなら、どちらのモデルも普遍的には適用されえないからである。なお一言付言しておくと、ここで、「痛み」という言葉は記述のときと表出のときと、二つの意味がある、多義的である、と主張されているわけではない。「痛み」は、どちらの場合でも同じ事柄を指している。ただその言葉は異なって使用されるのである(LW I §899)。これらを確認した上で、先の問いは次のように問い直されなければならない。「痛みがある」という文は、どのような種類の脈絡、状況の中に生じるか、と(cf.PU p.188)。この文が現れる諸状況の間の相違を正確に

記述することが肝要である――これが結論である。

直ちに反論が生じるだろう。痛みは心的な事象である、「痛みがある」という文が使用される状況を区別して記述するだけでは、人間の精神に何も言及していないではないか、と。しかし、この反論は不当である。例えば(cf.NL pp.302-304)、誠実に「痛みがある」と語られる状況と、不誠実に「痛みがある」と語られる状況とを、正確に区別して記述する。そこでは、人間の振舞いや発話などが記述されるだろう。これらは人間の精神の外側にあるいわば死せるものであって、真の哲学的分析がその内側の生ける精神そのものを明らかにするのだ、と考えるのは自然なことである。しかしながら、もしも人間の振舞いや発話その他諸々の、人間の日常の事象が「死せるもの」だとしたら、人間の真に生きる場所はどこにあるのだろう。そして「生けるもの」へ至る手掛かりは「死せるもの」ばかりの中からどうやって見出されるのだろう。誠実に「痛みがある」と語られる状況と不誠実に「痛みがある」と語られる状況との区別は、本当に痛みのある振舞いや発話と、本当は痛みがない振舞いや発話とを、区別するだろう。我々は、どういう場合に痛みがあり、どういう場合に痛みが偽装されているかを知るだろう。これは十分な成果である。痛みが記述的なものであろうと表出であろうと、そこに私的なものと公的なものとの分離がないことは、これまで考察してきた通りである。しかし、だからといって、どうして人間の心が扱われなかったということになるのだろうか。

註

(1) なぜ痛みが哲学的に問題になるのか（なぜウィトゲンシュタインは痛みを考察の俎上に載せたのか）については、以下を参照のこと。奥雅博「私的言語と言語ゲーム」（日本哲学会『哲学』第21号、1971年）、及び、David Pears, *The False Prison : A Study of Wittgenstein's Philosophy,* Vol. 2 (Clarendon Press, 1988) pp. 308-309.

(2) ウィトゲンシュタインの著作等への言及は次の略号による。

Z : *Zettel* (Suhrkamp, 1982).

RPP Ⅰ : *Remarks on the Philosophy of Psychology,* Volume Ⅰ (Blackwell, 1980).

RPP Ⅱ : *Remarks on the Philosophy of Psychology,* Volume Ⅱ (Blackwell, 1980).

PU : *Philosophische Untersuchungen* (Blackwell, 1953).

PG : *Philosophische Grammatik* (Suhrkamp, 1989). （小論では Teil Ⅰ のみに言及。）

NL : 'Wittgenstein's Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data" ', *Philosophical Review,* 77 (1968), 271-320.

LSP : 'The Language of Sense Data and Private Experience—Notes taken by R. Rhees of

Wittgenstein's Lectures, 1936', *Philosophical Investigations,* 7 (1984), 1-45, 101-140.

ÜG : *Über Gewißheit* (Blackwell, 1969).

UW : 'Ursache und Wirkung : Intuitives Erfassen', *Philosophia,* 6 (1976), 391-445 ; reprinted in PO.

VB : *Vermischte Bemerkungen* (Suhrkamp, 1994).

LW I : *Last Writings on the Philosophy of Psychology,* Volume I (Blackwell, 1982).

PO : *Philosophical Occasions 1912-1951* (Hackett, 1993).

(3) cf. Hans-Johann Glock, *A Wittgenstein Dictionary* (Blackwell, 1996), p. 53.

(4) 「規準」については、拙論「ウィトゲンシュタインにおける規準概念」（『アルケー関西哲学会年報』第5号、1997年）を参照されたい。

(5) このことに対する反論として、記憶の可謬性を引き合いに出すことは筋違いである。訂正されうるのはあくまで記憶であって、最初の感覚ではない。

(6) 「家族的類似性」については、拙論「家族的類似性について」（神戸大学哲学懇話会『愛知』第12、13合併号、1997年）を参照されたい。

(7) cf. Bertrand Russell "The Limits of Empiricism", *Proceedings of the Aristotelian Society,* 1935/36, 131-150.

(8) cf. Peter Winch, "Im Anfang war die Tat" in Irving Block ed. , *Perspectives on the Philosophy of Wittgenstein* (MIT Press, 1981), 159-178.

〔哲学研修員〕

The Analysis of Pain

Akira HAJI

What does it mean to say "I am in pain"?

First, this utterance can be descriptive, because it is a basis for truth-functional operations and therefore it is capable of being true or false. But, it isn't based on inner observation or recognition of a private phenomenon. For, in a psychological report, there is no distinction between a description and what is described. Indeed, we have no intelligible answers to the question "How do you know that you have a pain?". Therefore, it is possible that we don't regard a sentence like "I am in pain" as a description.

Second, reports on pain can be characterized as avowals (Äußerungen). They are substitutes for, and learnt extensions of, natural expressions of pain, such as cries or grimaces. They aren't descriptions of private mental entities. Sensation-language is built on a pre-linguistic structure of actions. The origin of the language game is an action, a reaction or a behaviour; only from these can more complicated games develop. Therefore, the basic form of the game can't include doubt.

And an avowal is language under the conditions that (a) there are regular connections between vocalizations and actions; (b) avowals are attached to something outside our minds; (c) there are subjective qualities (qualia) of sensation. But, a sentence like "I am in pain" isn't always reduced to an avowal. That is to say, there can be an utterance that is language, but not avowal. We shouldn't think too much of the concept of avowal.

Therefore, we can regard a pain as descriptive or as an avowal. The initial question is: In what sort of context does the sentence "I am in pain" occur?——This is our conclusion.